

研究ノート

子どもと大人のサードプレイス

——ちやいんどビレッジの活動における課題と展望——

平 野 知 見

目次

はじめに：研究の背景

1. 地域の課題と研究目的

2. 2021年度「ちやいんどビレッジ in 山中町」の活動実態

3. 振り返りシートの記述から見えた課題

おわりに：活動成果の地域への還元方法及び今後の展望

はじめに：研究の背景

日本では、2020年4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に最初の新型コロナウイルス緊急事態宣言が出され、4月16日に対象が全国に拡大された。この緊急事態宣言発令以降、学校園が休校休園し、登校登園できなくなった子どもたちは自粛、ステイホームは遊び場・縦のつながり等の喪失に加え、心理的身体的ストレスが増えた。また働く親は家庭内での仕事と家事の両立、仕事に家事に集中できないことに対してストレスを抱えてしまい、他者との関わりがより少なくなり孤立してしまう保護者が増えた。土日、祝日など曜日に関係なく職場に行く必要がある医療従事者である親からは、子どもが休みの日に1日預かってくれたり、遊び場を提供してくれる場所がないだろうかという声が地域住民を通して耳に入ってきた。本研究活動の活動地域は、大津市山中比叡平地域であり、山中町住民の工房を活動の拠点としている。山中町とは、比叡山中に位置し、西側は山城国（京都）、東側は近江国の国境の集落で、志賀越えあるいは山中越えと呼ばれる山道が、滋賀県から京都北白川に通じている。その山中町にて2021年より、子どもと大人の居場所づくりを実施している。もともと、山中町の住民であるA氏は、働く親の子どもの預かりをボランティアで行っており大津市比叡平や京都市の子どもたちが集うことが多くあった。しかし、2020年最初の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発令され、学校園が休校休園、登園登校できなくなった子どもたちにとって、自粛、ステイホームは遊び場・縦のつながり等の喪失に加え、心理的身体的ストレスが増えた。また働く親にとっては家庭内での仕事と家事の両立、仕事に家事に集中できないことに対してストレスを抱えてしまう状況に陥り、他者との関わりがより少なくなり孤立してしまう保護者が増えた。このような状況から子どもや大人の居場所づくりの必要性を問い、今どのように彼らのサポートができるのか

検討し始めたのが親子の居場所づくり活動に至るきっかけである。人員確保のために、当初は学生ボランティアを1名動員（現在5人前後配置）し、2021年1月から始動し、通常は毎月第4日曜日、親の要望に応じて長期休暇は不定期開催している。現在までの参加者は、京都市、大津市在住の就学前の子ども、小学生、中学生、高校生、医療従事者の子ども、不登校の子ども、そして保護者、課外活動に興味のある大人、等である。

1. 地域の課題と研究目的

日本社会の流れとして、地域から隔離するのではなく「地域に住み続ける」ことが求められている。アメリカの社会学者であるレイ・オルデンバーグは、街の居場所を定義し、第一の場所（自宅）、第二の場所（職場：その人が最も長く時間を過ごす場所）に加え、第三の場所（市民が憩い交流できる場所、より創造的な交流が生まれる場所）の存在が、生活者の暮らしの質を高めると提唱している。しかしながら、本研究活動のフィールドとなる山中町は、高齢者地域であり、空き家も多く存在する。「地域に住み続ける」ためには、在住する「動ける」世代が「地域」の特性を見極め、地域資源をネットワーク化するためにも多種多様な人がプロセスに参加することが必要であると認識することが必須である。そのためにも、地域の高齢者の人たちとの活動に関わる具体的な連携が課題である。

上記を踏まえ、本研究では大津市山中町において京都府及び滋賀県に在住の就学前の子ども、小学生、その親を対象に多様な人々にとって安心し自立できるサードプレイス「ちゃいんどビレッジ in 山中町（代表：中村健）」の活動及び人材について検討することを目的とする。

2. 2021年度「ちゃいんどビレッジ in 山中町」の活動実態

本活動は、子どもたちや大人が集う地域が増えることを願って「ちゃいんどビレッジ」と命名した。そして参加者や地域の方からは「ちゃいんど」という愛称で少しずつではあるが、認知され活動がすこしずつ浸透し始めている。

本活動は先述のように毎月第4日曜日を主たる活動日とした。活動時間は午前10時から午後16時（午前活動10時～12時、昼食、午後活動13時～16時）を基本スケジュールとした。子どもの参加はおおよそ、毎回15人前後（就学前の子どもから小学生）であった。保護者の参加や大人だけの参加もあるなど、学生や地域の高齢者も加えると「ちゃいんどビレッジ」が多世代間交流を通して実施しているとも言える。

まず初めに以下の表1.「ちゃいんどビレッジ in 山中町」の活動日及び活動内容を参照されたい。

表1.「ちゃいんどビレッジ in 山中町」の活動日及び活動内容

開催日	主となる活動内容
2021年 4月25日	午前活動①大津市比叡平「青い鳥の谷」での川遊び（カニ、昆虫探し） ②アスレチック遊び ③カニの観察記録作成 午後活動①山中町茶摘み体験 ②山中茶づくり探求 ●おやつ：綿あめ、他     上段左写真1：山中町で採取した草花で髪飾り 上段右写真2：お茶の葉摘み 下段左写真3：青い鳥の谷で川遊び（カニ探し） 下段右写真4：青い鳥の谷の遊具
5月23日	午前活動①山中町タケノコ狩り 午後活動①陶芸 ②ステンドグラス工作 ③たけのこ炭火焼 ④川遊び ●おやつ：白玉団子づくり   左写真5：山中町竹林にてタケノコ狩り 右写真6：工房前の川遊び

6月27日	午前活動①ビワの実と葉採集（ビワの葉で草木染） 午後活動①スライムづくり ②七夕かざりづくり ③キューブ ④川遊び ●おやつ：水無月（和菓子）作り   左写真7：ビワの実・葉採取 右写真8：スライムづくり
7月25日	午前活動①地域の方による紙芝居（即興劇） ②スライムづくり ③写真立て&水鉄砲 ④シャボン玉づくり ⑤地域の方手作りの流しそうめん 午後活動①陶芸 ②お手玉づくり（キャンセル） ③シャボン玉づくり ④川遊び ●おやつ：かき氷，綿あめ    上段写真9：地域の方による紙芝居 下段左写真10：流しそうめんを楽しむ子どもたち 下段右写真11：地域の方による流しそうめん台製作

8月緊急事態宣言により不定期開催	地域の子どものみでの小さな夏祭り ※22日（通常活動）は山中町豪雨による被害のため、中止   左写真12：ヨーヨー釣り 右写真13：お菓子釣り
9月26日	午前活動①大津市比叡平の「青い鳥の谷」 午後活動①秋探し散策（山中町）・植物採集 ②秋のスワッグ&ブーケづくり ③木の葉・どんぐり収集工作 ④プレイマウス立体工作 ●おやつ：どら焼き（ホットプレート）   左写真14：青い鳥の谷でのお弁当タイム 右写真15：プレイマウスで立体物を製作中の子どもたち
10月24日	午前活動①山中散策・柿採取 午後活動①ハロウィン製作（フェイスペインティング、カボチャバックづくり、カボチャ帽子、ハロウィンお面）、スワッグづくり ②外遊び ●おやつ：焼き芋、ホットケーキ（小豆）   左写真16：ハロウィンバック作成中の学生と子どもたち 右写真17：焼き芋体験

11月28日	午前活動：①山中散策 ②山中町グランドでの外遊び 午後活動：①クリスマスリースづくり ②クリスマスチャーム ③落ち葉ネックレス ④謎解きゲーム ●おやつ：ドラム缶焼き芋，ぜんざい 左写真18：5歳児のクリスマスリース 右写真19：工房外の落ち葉で遊ぶ学生と子どもたち
※12月26日大雪のため中止 12月30日地域の方と集合	昼から活動：しめ縄飾りづくり，餅つき ぜんざい，餡子餅，豆餅，きな粉餅，えび餅，ヨモギ餅の手作り餅づくり，小餅を地域の方々に配布。 上段左写真20：しめ縄づくり 上段右写真21：完成したしめ縄飾り 下段左写真22：餅つき 下段右写真23：皆で作った餡子餅と雑煮

2022年 1月23日中止	コロナ感染拡大のため中止
2月27日	午前活動①環境を考える活動：地域の小山氏の庭及び畑（ちゃいるどファーム）において 植物や虫クイズ ②畑の土壌づくり，ニンジン・小松菜苗うえ 午後活動①味噌づくり ②山中グラウンド（砂山遊び） ●おやつ：おはぎ，どら焼き，綿あめ     上段左写真24：小松菜苗植え 上段右写真25：イラストを交えて味噌づくりの説明 下段左写真26：味噌づくり 下段右写真27：山中グラウンドで砂山遊び
3月27日	午前活動①トムソーヤの家づくり（竹，木材） ②焚火クッキング：竹パン作り，畑の野菜でみそ汁づくり 午後活動①ちゃいるどファームにて丸太で看板づくり ②ちゃいるどファームでの外遊び ●桜餅，どら焼き，綿菓子   左写真28：試作のトムソーヤの家？の前でポーズ 右写真29：竹パン作り

通常（第4日曜日）の活動では、筆者ゼミの有志（2年次生～4年次生）が造形活動や遊びの企画をし、A氏による陶芸活動や山中町での活動の調整を行った。参加した学生は、毎回活動終了後、現地で振り返りを実施、または大学で集合し振り返りを行った。

本研究活動の成果として教育の点から、子どもを抱える保護者への対応（相談援助等）について、活動に参加することにより観察・実践を通して学ぶことにつながったのではないだろうか。また保育者を目指す学生にとっては、将来的に園所と地域との連携、保護者との連携は必須であるため、保育者としての資質向上にもつながると考えられる。

3. 振り返りシートの記述から見えた課題

学生スタッフの参加後、対面での振り返りに加え、振り返りシートへの記載（自由記述）を実施した。

振り返りシート「ちゃいんどビレッジ in 山中町の企画から実践まで」の質問事項については、以下の5問である。

- ①ゼミ内での企画に際して自身が行ったこと、及び取り組みを通して自身の課題は何か？
- ②「ちゃいんどビレッジ」の活動において、自身が“できたこと”と感じた事とは？
- ③「ちゃいんどビレッジの」の活動において、自身が“苦戦したこと（難しかった）”ことは？
- ④今後の自身の課題、及びどんな力（スキル）を身につけたいと思ったか？
- ⑤自由コメント

ここでは特に質問③及び④の問いに対しての回答で見えてきたことをまとめている。

質問③：「ちゃいんどビレッジ」の活動において自身が“苦戦したこと（難しかったこと）”とは何か？

質問④：今後どんな力（スキル）や能力を身につけたいと思ったか？

上記の質問における回答で質問③の「苦戦したこと」について一番多かったのは、「年齢層の幅が大きいため、関わり方が難しかった」であった。つまり、年齢層が就学前の子どもから小学生という対象が広いということにより、遊びの提供、関わり方、それぞれの子どもたちの想いの寄り添い方、がわからなかったとのことだった。また「注意の仕方がわからない」「安全面の配慮」といった回答もあった。外遊びや施設内での造形活動時において、人的、物的そして環境的な配慮が必要となってくるが、初めて出会う子どもや保護者の前では、臨機応変に対応することができなかったようである。

質問④の身につけたい「スキルや能力」については、子どもと一緒に遊ぶ基礎的体力や遊びの知識、子どもたちとの関わり（コミュニケーションのとりかた含）や援助の方法、子どもの安全に関する知識という回答が多かった。

学生スタッフに関しての振り返り及び言動について観察して見えてきたことは、まず子どもたちに「注意」をしないといけないという気持ちだけが先走ってしまう、自分から子どもや大人に声を掛けられない、大人から指示がないと動けない、そして、何をして一緒に遊べばよいのかわからない、という他者との関わりや幼少期の遊びの経験の欠如によるものではないかと考えられ

るものであった。また地域の中で子どもや大人と関わり居場所づくりができる人材育成が必要ではないかという新たな課題が見えてきた。

一方、ちゃいんどビレッジに参加した親子の中には、この山中町の人や環境に魅了され、2022年から山中町に移住することになった親子や、ご夫婦で移住された方もおられるなど、四季を感じられる環境と京都に近い地域が移住を決断させる要因であったとのことだった。新たな「コミュニティの創造」というテーマを掲げていたように、少しずつ多様な人々に関わる中で、変化がおきているのではないだろうか。

おわりに：活動成果の地域への還元方法及び今後の展望

京都市内では、コロナ禍で接触感染のリスクを減らしたい保護者のニーズを鑑み、貸し切り制度を導入するなど、親子の遊び場や居場所を提供する動きがでてきている。しかしながら、現状は、その居場所づくりに関して、場や遊びを提供することが注目され、かつ急務となっている。これからの With コロナ時代において、長期間の休みや週末などの期間に有志が遊び場・居場所の提供をするという枠組みを超えて、「地域による地域のための居場所」ととらえ地域住民を巻きこみ、それを実施運営する人材の専門性を問うことの必要性を感じている。地域の居場所構築のための人材育成、そして誰もが自分が居住する地域において多様な人々とともに安心して生活し、住み継がれることを切望しているのではないだろうか。本研究では、学生や地域の方と協働しながら活動を企画・実施することによって、地域の特性に応じた活動を多様な背景をもった子どもや大人に継続して体験してもらうことが彼らの「サードプレイス」につながりつつある。「ちゃいんどビレッジ」の活動を地域の魅力と共に「発信」することで、今後も地域内外の人たちに興味をもってもらうことにつながると考えられるため、「発信」方法を改めて検討・再考する必要がある。また「地域に住み続ける」、そして「地域に移り住む」ことへの貢献となると考えられる。「ちゃいんどビレッジ」を継続的に実施することで、これからの地域共生社会の構築につながると期待する。また本研究のフィールドとなる地域における空き家や空き地を利用した活動の広がり、地域における人材確保及び、「風土の継承」、「コミュニティの創造」、「自然との共生」をテーマに、多様な人々にとって安心し自立できる居場所「サードプレイス」について検討しながら子どもと大人のサードプレイスづくりに携わることのできる人材育成に力を注ぎたいと考えている。また学会紀要・論文投稿等を通して、活動に関する情報発信をすることで、地域の子どもと大人にとってのサードプレイスが地域の価値を高める事業にもつながり、小規模であっても事業と地域を同時に検討する、そして地域の方たちと一緒に情報・活動発信を継続していくことで、新たな役割・仕事を生み出すことに貢献できると考える。

参考・引用文献

- 森一彦・加藤悠介・松原茂樹・山田あすか・松田雄二編著『福祉転用による建築・地域のリノベーション：成功事例でよくとく企画・設計・運営』学芸出版社，2018。
- レイ・オルデンバーグ（著）・マイク・モラスキー（解説）（その他）・忠平美幸（翻訳）『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房，2013。